天平勝宝二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺　矚　して作りし二首

4139　春の苑　紅　にほふ桃の花　下照る道に出で立つ娘子

○西本願寺本万葉集

天平勝寶二年三月一日之暮眺矚春苑桃李花作歌二首

4139　春苑紅尒保布桃花下照道尒出立嬬

【右注】

＊桃李…この歌には「桃の花」がうたわれている。「桃李」と並べ言うのは中国の慣用的な表現。諺にも「桃李もの言わざれども下自ずから蹊を成す」と並べていう。

＊眺矚…遠く見渡す意。

【語釈】

＊春の苑…漢語「春苑」の翻訳語（岩波新大系注）。次の歌に「我が園」とあって越中国府にあった家持の館の庭。

＊紅にほふ…紅色の桃の花が照り映えて咲いていること。右注に、春の日の「暮」とあり、薄暮に赤い桃の花がひときわ目立つ様子が歌われている。巻十七・3967の、天平十九年三月二日、病気療養中の大伴家持に宛てた大伴池主の書翰には、「暮春の風景は最も怜むべし。紅桃灼々にして、戯蝶花を廻りて舞ひ……」（晩春の風景はもっとも感動的である。紅の桃の花は明るく輝き、蝶は花にたわむれて飛び回る）と、『遊仙人屈』を思わせる句がある。季節は同じころ。

＊下照る道…桃の花の色が明るく照り映えた園内の小道。

＊娘子…原文は「嬬」と難しい字が使われている。うら若い女性。「出で立つ」は娘子が忽然と視界に入ってきたことをいう幻想的な表現。

【総釈】

巻十九の巻頭歌である。

大伴家持が越中に来てから三年半が過ぎた天平勝宝二（750）年三月の独詠歌である。当時、家持の年齢は三十二歳ぐらい。

この歌は、万葉集の秀句の一首に数えられている。しかし、読者はどんな印象を受けるだろうか。桃の花の下にいるヲトメは一人だろうか数人だろうか？　また、たたずんでいるのだろうか、散策しているのだろうか？

右注の「眺矚（ちょうしょく）」の語の意味が、高所から眺め渡す意（岩波新大系注）だとすると、歌の印象はまた違ってくるのではないか。その場合、家持は望楼のような建

物の上から園内を見下ろしていたことになるが、どうだろうか？

少なくとも言えることは、近代の正岡子規の短歌のように見たままを「写生」したものではないということである。万葉集の時代に「写生」とか「写実」とかは無かった。あるいは、じっさいに桃李の花咲く春の苑を家持が眺めていたかも知れない。しかし、その景色を歌に表現する場合は、自分が学んだことのある知識にアイディアを借りなければならなかった。

この歌の表現の手本になるような和歌はそれまで無かったから、なにがヒントになっているかといえば、中国の漢籍の知識しか考えられない。それは右注の「春苑」「桃李」「眺矚」または「紅桃」などの漢語によっても明らかである。岩波新大系本では、この歌は「桃李もの言わざれども下自ずから蹊（こみち）を成す」の諺にもとづいたものだとまで断言している。桃や李は中国が原産だという。少なくとも桃や李の花を愛好して詩歌に詠む伝統は中国のものであった。

大伴家持は漢籍の知識によって桃花咲く春苑の幻想的な世界をつくりあげたのである。園内の桃や娘子は中国の桃源郷を思わせるだろう。つまりこの歌は、いわゆる「文芸性の高い」詩歌を創作するという文学意識が強くでた作である。

▽この歌との関連で引き合いに出されるのは正倉院所蔵「鳥毛立女屏風」

「鳥毛立女屏風」（第三扇）

＊聖武天皇の身近で使用されたものと推測されている。唐風の女性像から渡来画家の筆になる絵らしい。女性を覆う樹木は不明だが、藤の花（？）らしきものが垂れ下がっている。